

## 大阪国語教育アセンブリー 2014

### 第一分科会〈国語教育の蓄積と対話〉

「大村はま氏ら先人から学んだこと―誰もが可能な授業実践の開発に向けて―」

発表者 舟橋 秀晃 (大和大学准教授)

司会者 永田 里美 (西寝屋川高校)

記録者 松本 匡平 (高槻高校)

### 発表内容記録

I : 授業実践の開発での私の立脚点

0. 教育をめぐる我が国のこれまでとこれから

- ・「真似するところはすべて真似せよ」、という大村はま先生の言葉に照らせば、「怒られる」実践かもしれない。しかし、大村先生の実践は非常に難しい。それでも、何ができるのかを考えたい。
- ・現代は「行動主義」教育への批判があり、「社会的構成主義」の潮流となっている。PISAなどもその流れを含んでいる。同じカリキュラムでなぜ違う子供が育つのか、という問いに答えねばならない。つまり人間は、集団の学びの意味があり、自分の身体の中で、出会ってきた人との関わりから、社会的なものを「構成」していく存在である。答えを飲み込み応えるのではなく、自分たち一人一人が文化を共有し、文化を作り出すことが大切である。  
しかし、中高の国語は週3, 4回であり、また、教材がカリキュラムになる、という問題がある。

1. 生かす「べき」国語教育の蓄積

- ・大村はま「優劣のかなたに」。  
知っていたレベルではなく、なぜ学習者同士の違いが生まれたのかを考えさせる。「なぜ」を突きつける。
- ・「それはね、このいい頭が考えるのよ」批判をした大村はまは、「支援」と「教え込み」との間に「大事な指導」があるのでは、を問いかける。
- ・学習用語の確立が不十分。無自覚以上に、何ができたかの自覚が大切ではないか。

2. 生かし「たい」国語教育の蓄積

- ・「実の場」という言葉の定義が曖昧であったが、単元学習だけではうまくいかないので、せめて「仮の場」が可能ではないか、と考えた。

「仮の場」＝シミュレーション的な言語活動（次善の策ではあるのであるが。）

### 3. 生か「せる」国語教育の蓄積

- ・似ているもののグルーピングにとどまらず、似ているものの「違い」に気づくことが面白いのでは？

例) 「なつかしい」「恋しい」の違いは？

- ・「班の意見をまとめよ」はいまいち。生徒間の力関係なども影響

←→共通点、相違点、見つけたこと、他の誰かが見つけたことを発表させる。「類比」の手法。手間はかかるが、有効である。

## II：説明的文章指導における問題の所在

### 0. ジャンル意識の混乱

- ・評論は「論理的」か？説明的文章は論理的というのは短絡的。「評論文学」という言い方もある。「絶対に真か」という問題がある。評論は社会的な論理性なので、数学や理科とは異なる。真偽ではなく、むしろ、日常言語は蓋然性が高いことを踏まえないといけない。

### 1. 中学校段階での系統性をどう考えるか

- ・事実からどのような意見を見つけ出すか、がポイントになるのでは。内閣支持率〇〇%「も」か、「しか」という言葉自体に、考えがある。

### 2. 「論理」＜「論理的思考」、 「論理展開」＜「論理構造」の区別を

- ・論理かレトリックかの区別が必要ではないか。

## III：実践「納得できる？どこを調べる？－『花の形に秘められたふしぎ』－」（教出中1）

### 4. 学習過程

具体的実践例) ノートの例

教材一本か複数か、という問いかけから授業を始めた。

問いと答えの関係を見つけてみる。

（ノートをすべて毎授業スキャンしていた）

「序論、本論、結論」という型があれば、それからずれたものも理解できるようになる。

文末だけは確認させる。→筆者の主張は何だったのかを考えさせる。

6 時限目) 「仮の場」、に対して授業をしたので、確認するような場を作る。何を学んだかをまとめる。筆者の考えに納得できたかどうか、賛成・反対・保留でまとめる。（大西忠

治の主張から。)

たとえば、「風媒花」の話がない、と気づいて終わる。よくやったのではないか。

## 質疑応答

・永田（西寝屋川）

「教え込み」からの脱却、探求の場を作る＝仮の場、を作り出すポイントやヒントはないか？

→教えるべき内容は各学年であるが、「半年後」を想定してみると、子どもの引っ掛かりが見えてくる。「琵琶湖タイム」では、先輩のポートフォリオ研究を眺めて、それを眺めるだけになる。縦割り 3 学年のグループになると、先輩から後輩への気づかせもあるのでは。子どものリアルな問題点を指摘するべきではないか。

急にはできないが、国語の問題について、半年後を前倒ししてやるのはどうか。

・森田（近大附属）

国語は何を教えるかが明確ではない、ということが書かれているのでは。何をどれだけ教えればよいのかという問題が、特に現代文にはあるのではないか。では、仮の場で何を拾っていくのが、リアルな問題に対応するとはいえ、場当たりのではないか。特に現代文分野で、小中高で何を国語で身につけさせるかが、もしご意見があれば教えていただきたい。

→論理的、という意味ではまだ試案。自分の経験では、一人で理想のカリキュラムをできるのではないので、学習指導要領を、仕方なく、目標としてきた。

・何が現行の指導要領で不足しているのか？

→変えようがないという前提。物理的に指導事項が限られてくる。小学校はまだ指導時間が多いが、中学校では、あまりに時間が少ないので、説明的文章も小説も「どんぶり」に入れるしかない。精緻にすると、現場は窮屈になる。が、例えば中 1 で「事実と意見」はいかがなものか、と思われる。

・松本（高槻）

大村はまの実践と指導要領の間にずれがあるのではないか。

→大村の実践はすごく、目標の実践も複雑化しているが、生活に生きるという点は、「仮の場」で確保したい。評価はどうするのか。

→かつての生徒の言動からの変化に着目することが大切である。

・永田（西寝屋川）

21 世紀型思考力など、日常の言語生活に視点を据えて、先生が指導するという「姿勢作り」が肝心ではないか。大村はまをベースにしながら、誰もができる実践とは何か。

→目標が一つでないと、教えづらい。予算、努力なども必要。しかし、社会的構成主義の流れがある。作品を複数で展開することが一つのヒントになる。また、「序論・本論・結論」「文末を見る」「助詞を見る」などの、観点を丁寧に押さえることが必要ではないか。